

ア系統指示詞の用法に関する一考察

Notes on the usage of a-series demonstratives

庵 功雄

IORI Isao

【キーワード】 観念指示、現場指示、発見の文脈、ア系統指示詞、助詞の有無

【要旨】

ア系統指示詞には現場指示用法と観念指示用法がある。あるものが現場に存在することを発見してそのまま述べるという発見の文脈では名詞句の形式の違いに応じて両解釈が分布している。本稿では、こうしたア系統の解釈に関与する要因として、助詞「が」の有無及び「あの」と「あんな」の違いという二点を取り上げ、それらの解釈が現れるメカニズムについて考察した。その結果、前者には認識内での対象の顕著さの高低が、後者には「あの」（ノ形）と「あんな」（ンナ形）の持つ定性表示機能の違いが、各々関与していることがわかった。

0. はじめに

指示詞の諸用法については佐久間(1951)以来多くの研究があり、ア系統には話し手の（聞き手がいる場合は話し手と聞き手に共通の¹⁾）観念内の要素を指す観念指示用法と、現場内の要素を指す現場指示用法があることが知られている。本稿では現場に存在する指示対象を発見してそのまま述べるという文脈（以下、「発見の文脈」と呼ぶ）におけるア系統指示詞の振舞いに関して、助詞の有無、ノ形（「あの」）とンナ形（「あんな」）の違いという観点から考察する。

*1 ただし、聞き手がいる場合に、ア系統で指される要素が、話し手と聞き手が共通体験を持つ要素に限られるのは、運用論的な制約であり、ア系統が持つ意味論的な性質ではないと考えられる（cf. 金水・田窪(1992)）。

1. ノ形をめぐる

まず、ノ形（「あの」）と助詞の有無の相関という問題について考える。

1.1. 問題となる現象

前述のように、ア系統には現場指示と観念指示の二つの用法がある。両者の違いは次のような例を見るとわかる。

(1) 去年の今頃一緒に食事をしたでしょ。これがあのレストランですよ。

(2) 去年の今頃一緒に食事をしたでしょ。（むこうに見える）あれがあのレストランですよ。

即ち、(1) (2)の実下線部のア系統は話し手の観念内の要素を指しており、そのため現場における距離とは独立している（(1)の破線部がコ系統であることに注意）。一方、(2)の破線部のア系統は現場の要素を指しており、そのため（「むこう」で表されるような）遠距離の要素しか指すことができない。

以上を踏まえて、以下の例を考えていただきたい。ただし、全ての例は「発見の文脈」におけるものとする。なお、 ϕ はそこに要素がないことを表す。

- (3) a. あっ、あの時計 ϕ とまってる。
b. あっ、あの時計がとまってる。
- (4) a. あっ、あの紙 ϕ 破れてる。
b. あっ、あの紙が破れてる。
- (5) a. あっ、あの車 ϕ 走ってる。
b. あっ、あの車が走ってる。
- (6) a. あっ、あの人 ϕ こっちに来る。
b. あっ、あの人がこっちに来る。
- (7) a. ??あっ、あの手紙 ϕ 机の上にある。
b. あっ、あの手紙が机の上にある。
- (8) a. ??あっ、あの絵 ϕ 壁にかかっている。
b. あっ、あの絵が壁にかかっている。
- (9) a. あっ、あの服 ϕ きれいだ。
b. ??あっ、あの服がきれいだ。
- (10) a. あっ、あの人 ϕ 背が高い。

- b. ??あつ、あの人が背が高い。

以上の例を見ると、次のことがわかる。

- (11) a. (3)～(6) (9) (10)では「あの～ ϕ 」は現場指示の解釈が可能（むしろ、基本的には現場指示として解釈される）のに対し、(7) (8)ではこの解釈は不可能である。

- b. (3)～(8)において「あの～が」は観念指示の解釈しか持たないが、その解釈においては常に文法的である。ただし、(9) (10)では観念指示の解釈も不可能であり、文全体の文法性も低い。

ここでつぎの二つのことに注意していただきたい。一つは、(11) aはこれらの例の「あの～ ϕ 」に観念指示の読みがあることを排除していないということである。実際、(7) a (8) aは観念指示の読みでは文法的であると思われる。今一つは、(3)～(8)のb文が発せられる状況は少ないと思われるが、そうした文脈の有標性とこれらの文の文法性は別問題であるということである。重要なのは、そうした有標の文脈ではこれらの文は常に文法的であるという点である。

1.2. 現象の説明

次に、(11)で観察された現象に対する説明を試みる。

まず、(9) (10)についてだが、これは尾上(1987)、大谷(1995)などで考察されている「ハもガも使えない文」であると考えられる。大谷(1995)が考察しているように、こうした「deixisを伴う名詞句が主語の位置にあり、センテンスタイプとしては判断文でありながら、情報の流れとしては、主語、述語いずれも現場の文脈に登場していないため、全体が新情報を持つ文」では基本的には「は」も「が」も使えない。実際、(9) (10)を含め、上記の(3)～(10)の各文において「は」は使えない。

上述の大谷(1995)の観察は基本的には正しいと思われる。実際、(3) bが観念指示として文法的であるのに対し、次の(12) bは非文法的である。

- (12) a. あつ、この時計 ϕ 止まってる。

- b. *あつ、この時計 が止まってる。((12) a, bは甲斐(1991)より)

コ系統とア系統でこうした違いが見られるのは、コ系統は現場指示の解釈しか持たないのに対し、ア系統は現場指示の他に観念指示の解釈をも持ち得るた

めであると考えられる*2。つまり、こうした発見の文脈では通常、ダイクシスを伴う語が主格位置に来ると「「は」も「が」も使えない文」になる。そして、そのことは(9)(10)のように述語が「属性」を表す文の場合にはア系統においても成り立つ。これは述語が「属性」である場合には判断文的性格が強くなり、発見の文脈で要求される現象描写文的性格との矛盾が拡大するためであろう。ただし、以下に見るように、それ以外のタイプの述語の場合には「あの～が」は観念指示という有標な解釈ではあるが文法的になるので、上述の大谷(1995)の規定は強すぎるのではないかと思われる。

次に、(11)の内、「あの～が」が文法的である(3)～(8)について考察する。

まず、(11)bに対する説明から始めるが、その前につぎの二つの仮定を行う。

(13) a. 指示対象となり得る要素(指示トリガー)が現場に存在する場合、
観念指示の解釈は現場指示の解釈より有標である。

b. 「主格定名詞句+が」には総記の解釈がある(強い)が、「主格不定名詞句+が」ではその解釈は困難である。

(13)aは金水・田窪(1990)における「指示トリガー・ハイアラキー」と同趣旨の仮定である。指示トリガー・ハイアラキーとは、指示詞の先行詞(トリガー)となり得る要素が複数の心的空間(スペース)に存在する場合、どの空間の要素が先行詞として選ばれるかに関する階層(ハイアラキー)であり、次のような手順で定められている。(14)a～dは金水・田窪(1990)より。なお、これらは同一話者の連続した発話とする)

(14) a. 私は10年前 1冊の本を書いた。

b. {その本／?あの本}は人々に高く評価され、賞をとった。

文脈 観念

c. それがこの本だ。

現場

*2 ソ系統もコ系統と同様の振舞いを示す。

(7) あっ、その時計φ／*が止まってるよ。

- d. {この本／*その本} は今でも多くの学生に読まれている。

現場 文脈

まず、(14)bではa文中の「1冊の本」がトリガーとして選ばれる（注1で見たとように、ここで聞き手がいる場合には運用論的制約によって観念指示は抑圧される）。次に、cにおいて現場の要素が潜在的なトリガーとして現れる。そして、最後のdにおいて文脈内の要素がトリガーとなるか現場の要素がトリガーとなるかを見ると、現場の要素が選ばれることがわかる。同様の観察を行うと以下のような階層が得られる（cf. 金水・田窪(1990)）。

- (15) 現場スペース>経験スペース>>その他

(13)aは現場に指示対象が存在する場合にもこの階層が成り立つとするものである。この仮定（＝指示対象が現場に存在する場合には、それを現場指示として指すのが無標）は妥当なものであると考えられる。

次に、(13)bの妥当性については次の例を考えていただきたい。

- (16)a. 太郎が来た。

- b. 男の人が来た。

- (17)a. 太郎が運動場を走ってる。

- b. 男の子が運動場を走ってる。

この(16)(17)のaには中立叙述の読みもあるが、総記の読みもあり、通常の文脈では後者の読みの方が強いのではないと思われる^{*3}。一方、bでは総記の読みは取りにくい。このことから(13)bは妥当な仮定であると思われる。

さて、(13)a, bの仮定が妥当であるとすれば、(3)b～(8)bの文法性は次のように説明される。まず、(13)aより、発見の文脈において観念指示の解釈は有標なものである。一方、(13)bより、「主格定名詞句+が」は総記の読みを持ちやすいが、発見の文脈で通常用いられるのは、文全体が新情報である現象描写文であり、その場合の「主格名詞句+が」は中立叙述の解釈を受ける。従って、

*3 「総記」「中立叙述」の規定は久野(1973)に従う。

発見の文脈では総記の解釈⁴は有標なものである。以上のことから、発見の文脈で「あの～が」が観念指示の解釈を持つのは、この文脈では、観念指示、及び、総記の解釈が共に有標であることによると考えられるのである（前述のように、(3)b～(8)bが用いられる文脈は限られているが、これはこうした有標性の反映であると解釈できる）。以上の観察は次のようにまとめられる。

- (18) 「あの～が」は観念指示（有標の解釈）を持つ。そして、そうした
有標の解釈としては常に適格になる。

以上で(11)bに対する説明を終わり、次に(11)aに対する説明を行う。ここで、次の2点を確認しておきたい。

- (19) a. 文頭位置は主題性が高い。

- b. 現象描写文は主題を含まない。(cf. 仁田(1986, 1997a))⁵

庵(1998)でも触れたように、「主題」について考える際に「文頭」という要素は外せないものではないかと思われる。例えば、「は」が（単独で）主題を表すマーカであるとするれば、(20)aが主題化した文は(20)bでもいいはずだが、実際には(20)cでなければならない。一方、例えば、英語における「定」の形態論的マーカである定冠詞は、(21)からわかるように、単独で定という名詞句のステータスをマークすることができる。こうしたことから、(19)aの仮定は妥当なものと考えられる。

- (20) a. 太郎が花子を殺した。

- b. *太郎が花子は殺した。

- c. 花子は太郎が殺した。

- (21) a. The boy killed Mary.

- b. John killed the boy.

*4 ただし、(3)b～(8)bと(9)b(10)bには明らかな許容度の違いがあり、後者の「あの～が」は典型的な総記の解釈を受けるので、前者の「あの～が」を「総記」と言い切ってしまうことには問題があるかもしれない。

*5 なお、仁田(1997)は従来の「現象描写文」を「感覚器官による直接的補足」を表す文、としている。

次に、(19)bだが、これは三尾(1948)の現象文、佐治(1973)の存現文、仁田(1986)の現象描写文などに見られる共通理解といってよいと思われる。

以上のことを踏まえて(11)aに対する説明を試みる。

- (11) a. (3)～(6)(9)(10)では「あの～ ϕ 」は現場指示の解釈が可能(むしろ、基本的には現場指示として解釈される)のに対し、(7)(8)ではこの解釈は不可能である。

まず、(3)～(6)の述語を見ると、(3)(4)は「状態」*6、(7)(8)は「(広義の)存在」であり、いずれも状態的である。「は」と「が」の研究においてこうした述語の場合には基本的に「は」が用いられ「が」を用いると総記の解釈になることが指摘されている(cf. 久野(1973)etc.)が、これは別の見方をすると、こうした述語から構成される文のガ格の位置は主題性が高いと解釈できる。従って、(3)(4)(7)(8)のa文の「あの～ ϕ 」は主題性が高く、他の条件がなければ、(19)bにより、発見の文脈では使えない。(7)a(8)aの文法性の低さはこのことから説明できる。

では、(3)a(4)aはなぜ文法的なのか。このことについて考えるために(22)aについて考えていただきたい。

- (22) a. あっ、雨が降ってない。
b. あっ、雨が降ってる。

一般に現象描写文は否定になりにくい。確かに、(22)aは(22)bに比べて有標で使われる文脈は限られている。しかし、この文は現象描写文として存在可能であると思われる。例えば、「雨が降っているだろう」という思いこみがある時に窓を開けて「雨が降っていない」ことを「発見」した場合には(22)aは現象描写文として文法的であろう。この場合、「雨が降っているだろう」という思いこみの存在が(22)aの適格性を支えている。これと同様のことが(3)a(4)aのような「状態」を表す述語の場合にも言えるのではないと思われる。つまり、「(時計が)止まってる」「(紙が)破れてる」というのはそうした状態の存在から、「動いている」「破れていない」状態との対比が想定しやすいため、(22)aと同様の

*6 以下、「」つきの「状態」は状態性述語の下位概念を表すものとする。

理由で適格になるものと思われる。一方、(7)a(8)aのような「存在」の場合には「存在しないのではなく存在するのだ」といった認識は相対的に困難であり、そのために適格性が低くなるものと思われる。なお、(3)a(4)aは「現場指示」として文法的だが、これはこれらが上述のような意味での発話の動機付けを得た結果、典型的な（無標の）現象描写文として機能し得るためである。これに対し、(7)a(8)aが観念指示としては文法的であり得るのは、現場に指示対象が存在する場合にそれを観念指示として指すことは（極めて）有標な、いわば最後の手段（last resort）であるが、それだけにそれを行えばその有標な解釈では常に文法的になるということであると思われる。

最後に、(5)a(6)aだが、これについても(3)a(4)aに関する議論と同様の議論が成り立つ。まず、(5)a, bについて見てみると(23)のようなことがわかる。

(5) a. あっ、あの車走ってる。

b. あっ、あの車が走ってる。

(23) A. (5)a, bでは「走ってる」の意味が異なる。即ち、(5)bは一般的な「走行中」の意味であるのに対し、(5)aは「非停止」（「止まっているのではなく、走っているのだ」）の意味になる。

B. (5)a, bではイントネーションパターンが異なる。即ち、(5)bでは（普通の発話では）「あの車」にプロミネンスがあるのに対し、(5)aでは（普通の発話では）「走ってる」の前に立ち上げがあり、「走ってる」にプロミネンスが置かれる（同様のプロミネンスパターンの違いは(3)(4)(6)のa, b間にも見られる）。

この(23)Aの中の下線部はまさにa文を発話する動機付けを高めるものである。(23)Bで観察されるイントネーションパターンはこの文の意味に対応していると考えられる。これに対し、b文には「が」が存在し、それによって意味的にも音韻的にも「あの～が」が焦点になっているために、述部（「走ってる」）は意味的にも音韻的にも顕著さ(saliency)を奪われているものと考えられる。

1. 3. 発見の文脈の特殊性

1. 1., 1. 2. では発見の文脈におけるア系統の解釈について考察したが、なぜこうした現象が観察されるのであろうか。論者は、それは発見の文脈の特殊性

に由来するものだと考える。つまり、この文脈は指示対象が現場に存在するという点では一般の現場指示と共通だが、「発見」ということにより、指示対象が話し手の内部で確定しておらず、そのことがこうした分布の違いに反映しているのではないかとと思われるのである^{*7}。これに関して、Akatsuka(1985)が興味深い指摘をしている。Akatsuka(1985)は、(24)Bでは「のなら」だけが使えるが、(25)Bでは「のなら」は使えず、「から」を使わなければならないことを指摘し、それは、(24)Bの文脈では、「武田が冬のLSAに行くこと」は事実として認識されているが、その観念の中で確立していないためにBは仮定形式である「のなら」を使わなければならないのに対し、(25)Bの文脈では「武田が冬のLSAに行くこと」がBの観念の中で確立しているために仮定形式である「のなら」は使えず、理由を表す「から」が使われるためであるとしている^{*8} ((24) (25)はAkatsuka(1985)より。ただし、(24)に一部手を加えた)。

(24) 武田：僕、冬のLSAに行くことにしたよ。

B：君が行くのなら／*行ったら／*行けば／*行くから、僕も行くよ。

(25) ((24)Bが友人に)

B：武田さんがLSAに*行くのなら／行くから、僕も行くよ。

2. ノ形とンナ形

次に、ノ形（「あの」）とンナ形（「あんな」）について考える。なお、1で見たとように、((28) (29)を除いて)「あの～が」は常に文法的になるので、ここでは「あの～ ϕ 」と「あんな～が／ ϕ 」について考察する。

(26) a. あつ、あの時計 ϕ とまってる。(=(3)a)

b. ??あつ、あんな時計が／ ϕ とまってる。

*7 神尾(1998)も「話し手または聞き手に新しく伝えられたばかりの情報」は処理がかなり進むまで話し手または聞き手のなわばりに入らないとしている。

*8 (24) (25)ではBの発話の先行詞である「武田が冬のLSAに行く」という文の外延(真理値)は様相レベルまで考慮しても論理的には全く等価であることに注意されたい。

(cf. Akatsuka(1985:637))

- (27) a. あつ、あの紙 ϕ 破れてる。(=(4)a)
 b. ??あつ、あんな紙が $\diagup \phi$ 破れてる。
- (28) a. あつ、あの服 ϕ きれいだ。(=(9)a)
 b. ??あつ、あんな服が $\diagup \phi$ きれいだ。
- (29) a. あつ、あの人 ϕ 背が高い。(=(10)a)
 b. ??あつ、あんなの人が $\diagup \phi$ 背が高い。
- (30) a. あつ、あの車 ϕ 走ってる。(=(5)a)
 b. あつ、あんな車が $\diagup \phi$ 走ってる。
- (31) a. あつ、あの男の人 ϕ こっちに来る。(=(6)a)
 b. あつ、あんな男の人が $\diagup (?) \phi$ こっちに来る。
- (32) a. ??あつ、あの本 ϕ 床に落ちてる。(=(7)a)
 b. あつ、あんな本が $\diagup \phi$ 床に落ちてる。
- (33) a. ??あつ、あの絵 ϕ 壁にかかっている。(=(8)a)
 b. あつ、あんな絵が $\diagup \phi$ 壁にかかっている。

以上の例は次の3つに分類できることがわかる。

- (34) a. 「あの～ ϕ 」「あんな～が $\diagup \phi$ 」が共に文法的になる場合
 b. 「あの～ ϕ 」は文法的だが「あんな～が $\diagup \phi$ 」は非文法的な場合
 c. 「あの～ ϕ 」は非文法的だが「あんな～が $\diagup \phi$ 」は文法的な場合

以下、それぞれの場合について見ていく。

2. 1. 「状態」「属性」の場合

まず、(34)bについて考える。前述のように、この場合の述語は「状態」または「属性」であるが、ここで考察する現象に関しては両者を区別する必要はないと思われるので「状態」で代表させて考える。

さて、「状態」の場合にシナ形が許容されないのは、述語が状態の場合にはガ格の主題性が高いためであると考えられる。それは、次例からわかるように、

ンナ形は「は」と共起しにくいことから裏付けられる^{*9}。

(35) ??こんな／okこの冷蔵庫は壊れている。

(36) ??こんな／okこの話はおもしろい。

(37) ??そんな／okその男の人はアイスクリームを食べていた。

このようにンナ形が「は」と共起しにくいのはンナ形が「サブクラス」を構築する (cf. 川口(1984)) ためであると考えられる。つまり、ンナ形は背景に複数のものを含んだ形で指示対象を指示する (cf. 仁田(1997b)) ために、個体指示を前提とする主題とは相容れにくいのである。「は」という明示的な主題マーカを伴わない場合 (「あんな～φ」) でも同様にンナ形は主題とは共起しにくいと考えられる。一方、述語が状態的な場合、主格を「が」でマークするとその名詞句は総記と解釈される (久野(1973)) が、ンナ形はノ形よりも定性が低い^{*10}ため、(13)bより総記の解釈を持ちにくく、そのために、この環境では「あんな～が」も不適格になる。以上の理由で、述語が「状態」である場合にはンナ形は使いにくい。

これに対し、前述のように、述語が「状態」である場合は認識内での顕著さが相対的に高いため「あの～φ」は適格になる。

2.2. (広義の)「存在」の場合

次に(34)cについて考えるが、前述のようにこの場合の述語は(広義の)「存在」である。ここで、「存在」に関わる場合にンナ形が適格になるのは、「存在」に関わる構文が「不定」と強く結びついているためであると考えられる。

「存在」を表す典型的な構文は「…に～がある／いる」という存在文だが、

*9 ンナ形が「は」と共起するのは基本的に否定や禁止を表す文に限られる。これはンナ形が持つクラス指示性によるものと思われる (cf. 川口(1984))。

(イ) こんな機械は??使える／使えない。 (cf. 金水(1986))

(ウ) この機械は使える／使えない。

*10 ンナ形は複数のものとして対象を指示する (cf. 川口(1984)、仁田(1997b)) が、内部に指示詞を含むため「不定を表すマーカ」とは言えない。

こうした存在文では限定詞を伴わない普通名詞句は「不定」と解釈される。

(38) 机の上に本があります。

一方、存在文では「定」をマークするノ形は使えず、より「不定」に近いンナ形が使われる^{*11}。

(39) 机の上にこんな本／??この本があります。

また、主題を表す「は」は存在文では使いにくい。

(40) ??机の上に本はあります。

cf. 本は机の上にあります。

以上のことから「存在」の場合にンナ形だけが使われるのはンナ形がノ形よりも不定性を強くマークすることによると考えられる。一方前述のように、こうした場合は認識内の顕著さが相対的に低いため「あの～φ」の適格性は低い。

2.3. 「運動（動き）」の場合

最後に(34)aだが、この場合の述語は「運動（動き）」を表すものである。こうした場合にはンナ形は許容されるが、これは運動するものは「単数」であっても「複数」であっても構わないためである^{*12}。なお、前述のように、この場合には認識内の顕著さが相対的に高いため「あの～φ」も許容される。

*11 ただし、過去時制の場合には次のようにノ形と存在文が共起し得る。

(エ) 机の上にこんな本が／この本がありました。

ただし、こうした文は（発話時に「本」は机の上にはないという点で）存在文の典型から外れているように思われる。なお、「あの」は現在時制でも使えるが、この場合もその解釈は観念指示になる（一方「あんな」は現場指示になる）。

(オ) あそこにあんな本が／あの本があります。

*12 なお、ここで言う「単数」「複数」は文法的な数（number）ではなく、対象のカテゴリ化に関わるものである。例えば、(カ)の下線部は必ずしも文法的な単数とは限らないが、日本語においては「単数」としてカテゴリ化され「個体」として把握されているのである（cf. 仁田(1997b)）。

(カ) この本を持っていってくれ。

3. まとめ

本稿では発見の文脈におけるア系統指示詞の振舞いについて考察した。

1では「あの～が」と「あの～ ϕ 」を比較した。その結果、「あの～が」は述語が「属性」の場合を除いて観念指示の読みでは常に文法的になるのに対し、「あの～ ϕ 」は述語が「運動」「状態」「属性」の時には現場指示の読みで文法的になるが述語が「存在」の時にはその読みでは文法的にならず、観念指示の読みしか持たないことがわかった。これは、基本的には各々の述語のタイプがそれと対立的な事態を想起させやすい（言い換えれば、認識内での顕著さが高い）か否かによるものである。

次に2では「あの～ ϕ 」と「あんな～が/ ϕ 」を比較し、その結果、述語が「運動」の時は両者とも文法的だが、「状態」「属性」の時は前者のみが、「存在」の時は後者のみが文法的になることがわかった。これはノ形（「あの」）とシナ形（「あんな」）が持つ定性表示機能の違いによるものである。即ち、ノ形は対象を「定」なる「個体」として指示するのに対し、シナ形は対象を「タイプ」として「不定」的に指示するが、この違いが上述の文法性の違いをもたらしていると考えられる。以上をまとめて図示すると次のようになる。

(41)

	あの～が	あの～ ϕ	あんな～が/ ϕ
「運動」	○（観念）	○（現場）	○（現場）
「存在」	○（観念）	×（現場） ○（観念）	○（現場）
「状態」	○（観念）	○（現場）	×
「属性」	×	○（現場）	×

本稿で観察した内容は、談話の初期段階における対象の認識のされ方という観点から興味深いものではないかと思われる。また、助詞を伴わない名詞句を

一律に「助詞の省略」とする扱いが妥当でないことも示すことができたのではないかと考える（この点については、丹羽(1989)、庵(1998)も参照されたい）。

論者は先に（庵(1998)）、名詞句のステータスに関してPrince(1981)の親和性の階層(familiarity hierarchy)を援用して、無助詞格名詞句の性質について考えた。その際には状況的既活性(situationally evoked)とテキスト的既活性(textually evoked)を合わせて既活性(evoked)とし、未活性(unevoked)と対立させたが^{*13}、厳密には発話現場内に存在するものが等しく活性化されているわけではなく、状況的既活性についてはさらなる考察が必要とされていた。本稿はそうした前稿の不完全部分を補うものでもある。

【参考文献】

- 庵 功雄(1998)「名詞句における助詞の有無と名詞句のステータスの相関についての一考察」『言語文化』35. 一橋大学
- 大谷博美(1995)「ハとガとϕ」『日本語類義表現の文法(上)』くろしお出版
- 尾上圭介(1987)「主語にハもガも使えない文について」昭和62年度国語学会春季大会発表要旨
- 甲斐ますみ(1991)「「は」はいかにして省略可能となるか」『日本語・日本文化』17 大阪外国語大学
- 神尾昭雄(1998)「情報のなわばり理論」『日英語比較選書2 談話と情報構造』研究社出版
- 川口順二(1984)「ソンナ+Nについて」『藝文研究』46. 慶応大学
- 金水 敏(1986)「連体修飾成分の機能」『松村明教授古稀記念国語研究論集』明治書院
- 金水 敏・田窪行則(1990)「談話管理理論から見た日本語の指示詞」『認知科学の発展』3. 講談社サイエンティフィック
- (1992)「日本語指示詞研究史から／へ」『日本語研究資料集 指示詞』ひつじ書房

*13 これらの概念について詳しくは庵(1998)、Prince(1981)を参照されたい。

- 久野 暉(1973)『日本文法研究』大修館書店
- 佐久間鼎(1951)『現代日本語の表現と語法(改訂版)』厚生閣(くろしお出版から再版)
- 佐治圭三(1973)「題述文と存現文」『大阪外国語大学学報』29 大阪外国語大学
(佐治圭三(1991)『日本語の文法の研究』(ひつじ書房)に再掲)
- 田窪行則(1990)「対話における知識管理について」『アジアの諸言語と一般言語学』三省堂
- 仁田義雄(1986)「現象描写文をめぐって」『日本語学』5-2.
——(1997a)「断定をめぐって」『阪大日本語研究』9. 大阪大学
——(1997b)『日本語文法研究序説』くろしお出版
- 丹羽哲也(1989)「無助詞格の機能」『国語国文』58-10.
- 野田尚史(1996)『新日本語文法選書1「は」と「が」』くろしお出版
- 堀口和吉(1990)「指示詞コ・ソ・アの表現」『日本語学』9-3
- 三尾 砂(1948)『国語法文章論』三省堂
- 三上 章(1955)『現代語法新説』刀江書院(くろしお出版から再版)
——(1970)『文法小論集』くろしお出版
- Akatsuka, N.(1985) "Conditionals and the epistemic scale," *Language* 61.
- Prince, E.(1981) "Towards a taxonomy of given-new information," Cole, P.(ed.)
Radical pragmatics. Academic Press

【付記】

本稿をなすに当たって、研究会の席上で仁田義雄先生、野田尚史氏はじめ多くの方々から貴重な御意見をいただきました。記して感謝申し上げます。

(いおり いさお) 一橋大学留学生センター専任講師